



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第一八六号）

白露 はくろ

九月八日

セミ殻

あれほどかまびすしく鳴いていたセミはどこへ行ったのでしょうか。朝、セミの声で起こされることもなくなりました。

俳句の世界でもセミは夏の季語。松尾芭蕉の「閑さや岩にしみ入る蝉の声」など、夏の暑さの象徴としてセミの声は俳句に多く詠まれています。またセミが脱皮したときの抜け殻、空蝉うつせみという季語もあります。

梢よりあだに落ちけり蝉の殻

これは芭蕉が三四歳のときに詠んだ一句です。空蝉という誌的なものを、木の梢からセミの殻が落ちてきたと描写することでセミの實在が浮き上がり、俳諧の面白味ととらえたのです。ちょうどプロの俳諧師になるころですから、その意欲がうかがえます。

セミの殻でも、抜け殻、空蝉ではない俳句を見つけました。

蝉殻を踏めば怖ろしうすき声

中島夜汽車

この蝉殻は、セミの抜け殻ではなくて、力尽きたセミが地上にころがっている様を指しているのでしょう。無意識に踏んでしまったセミ殻から本来聞こえないはずの小さな声が聞こえ、それを断末魔だんまうまの悲鳴のように受け取ったのでしょうか。私も以前、道を歩いていて、不意にセミ殻を蹴飛ばしたことがあります。地上に落ちていてもまだ亡骸ではなくて、わずかに命を残していたのです。生命力にあふれる声でなくて、いまわの際きわのセミの声。強い日差しが照り付けていても、秋の気配が朝に夕に漂う九月白露のころです。

文 千種清美

